



日時

10月01日
14時30分

場所

立教大学 5号館
院生控室 教室

テキスト/テーマ

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』

編者/著者: マルクス
出版社: 大月書店(国民文庫32)
範囲: [4]~[6]



後半期 第1回/通算 第75回

ご案内-詳細

第二共和制の帰結は、ブルジョアジーのための民主制・自由主義・共和制が、そっくりそのままブルジョアジーに対する対抗手段になるということの経験を通じて、ブルジョアジー自身が政治的支配を放棄せざるを得なくなったということでした。
今回の内容について言うと、[4]ではバロー内閣の解任以後が扱われています。[5]では議会の統帥権の喪失と秩序党・純粹共和派・山岳党の連合とが、[6]では秩序党の分裂と議会の没落とが扱われています。

報告者

人名	割当
今井 祐之	[4]
浅川 雅巳	[5], [6]

出欠

出席
 欠席

『ブリュメール18日』は二月革命(第二共和制の成立)からルイ・ボナパルトのクーデター(第二帝政の成立)までの政治的変動を、階級闘争の発展と関連付けるということによって、解明しようとしています。このような特殊な事件の解明は、現代社会における国家の一般的な位置付けに、そしてまたそれを通じて未来社会へ実践的な道程に光を照らすはずです。

今回の内容について言うと、[4]ではバロー内閣の解任以後(1849/11/01～1850/05/31)が扱われています。この時期に、立法国民議会の内部での秩序党の独裁——ブルジョア独裁——が完成したわけです。今度は、立法国民議会そのもの(立法権力)とルイボナパルト(行政権力)との闘争がメインテーマになります。[5]では議会の統帥権の喪失と秩序党・純粹共和派・山岳党の連合と(1850/05/31～1851/04/11)が、また[6]では秩序党の分裂と議会そのものの没落と(1851/04/11～1851/12/02)が扱われています。

理論的には、特に資本主義の下での国家の役割(国家の相対的自立性なるもの)との関連で、このテキストは利用されてきました。また、これと関連して、ボナパルティズムが現代にとってどのような意義を持っているのかということが論じられてきました。それらの議論の良し悪しは別にして、マルクス主義の国家論なるものを行っている人たちと議論する際に、この本は基本的な教養をなしています。

当たり前ですが、このテキストには、当時の細かい歴史的事実が書かれているために、なかなか理解するのが厄介です。それに加えて、独り善がりな文体が読者の理解を困難にさせます。マルクスには文学的に表現する能力が全くなかったのですが、困ったことに、彼自身は自分に文才があると考えていたようです。このような困難は何人かで一緒に読めば、少しは軽減されるはずです。

とは言っても、あまり細かい歴史的な事実にこだわることなく、現在の社会状況との関連で、現代的な問題意識で、理論的に読んでいきたいと思います。

なお、テキストは品切れかもしれませんが(大学図書館などには必ずあるでしょう)。テキストを入手することができない方は、至急、

今井のところまでご連絡

ください。できるだけ早急

にコピーをお送りいた

します(コピー代、郵

送料はご本人の負担

といたします)。

